

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3303 号 2016.10.13 発行

パラに続け！ 文化・芸術で障害者の才能開花後押し 日本経済新聞 2016年10月12日



「SOMPOパラリンアート・サッカーアートコンテスト」でグランプリを受賞した飯山太陽さん（前列中央）

東京五輪・パラリンピックに向け、五輪憲章に基づく4年間の文化プログラムが国内各地で本格始動する。その目玉の一つが障害者アーティストの育成だ。パラリンピックを通じて、共生社会の実現を目指すことは2020年の日本にとって一大テーマ。スポーツだけでなく、文化・芸術の分野でも障害者の才能を生かせる環境を整えば、ダイバーシティ（多様性）を尊重する社会の実現が

一歩前進する。

文部科学省は10月19～22日に東京と京都で開催する東京五輪などのキックオフイベント「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」の中で、障害者アーティストの活動を紹介するプログラムを用意している。ロームシアター京都（京都市）での「アールブリュット展」、国立新美術館（東京・港）でのアート展「ここから アート・デザイン・障害を考える3日間」などだ。

例えば、「ここから」には、精巧な表現を得意とする自閉症の切り紙作家、藤岡祐機氏のほか、知的障害者施設「やまなみ工房」（滋賀県甲賀市）を拠点に、ボタンを布に縫い付けて丸めた「ボタンの玉」を手掛ける井村ももか氏ら12人のアーティストが作品を出展する。同フォーラムの文化分野を担当する文化庁は「20年に向けた『キックオフ』という機会をとらえ、障害のある人の優れた芸術を多くの人に知ってもらいたい」（芸術文化課）と期待する。



### SOMPOホールディングスの桜田謙悟社長

障害者アートの支援は企業でも活発になっている。例えば、損害保険ジャパン日本興亜は障がい者自立推進機構と連携し、サッカーをテーマにした絵画を募集する「SOMPOパラリンアート・サッカーアートコンテスト」を通じて、次世代アーティストの育成に乗り出した。コンテストでは、1862作品の中から、栃木県立益子特別支援学校に通う16歳の飯山太陽さんが描いた「未来のサッカースタジアム」がグランプリに選ばれた。

「グランプリを獲得できて、とてもうれしい」。いくつものスタジアムが空中に浮かんでいる絵画を「思いつくまま、自由に描いた」と話す飯山さんは9月9日の表彰式で、はにかむような笑顔を見せた。損保ジャパン日本興亜の田村康弘取締役常務執行役員は「障害者がアートを通じて夢を実現するという素晴らしいコンセプトを陰ながら応援していきたい」と受賞者にエールを送った。

SOMPOホールディングスは文科省が開催するフォーラムに協力しており、桜田謙悟社長は7月にフォーラムの「アンバサダー」に就任した。その就任式で、桜田社長はグル

ープで手がける介護事業に関連して「アートや絵画を高齢者と結びつける。あるいは障害者と結びつける。障害者のアーティスト、高齢者の施設とのパイプ役になっているアーティストもいるので、そういう人たちを応援したい」と語っている。

#### リオ・パラリンピック閉会式の引き継ぎ式

障害者アーティストの活動に注目が集まることで、創作者側も刺激を受けている。リオ・パラリンピック閉会式の引き継ぎ式のステージアドバイザーを務めたスローレーベルの栗栖良依代表は「障害のあるダンサーが舞台上がる環境の整備、それをサポートする人材の育成などに取り組み、世界を驚かせる芸術表現を生み出したい」と今後の活動に意欲を見せる。



スローレーベルは文科省のフォーラムの関連イベント「六本木アートナイト 2016」に参加し、10月22日に六本木ヒルズ（東京・港）で車いすのダンサーらによるパフォーマンスを披露するという。

五輪は「スポーツの祭典」とあると同時に「文化の祭典」でもある。スポーツではパラリンピックの注目度が上がり、障害者アスリートの存在感が強まった。今後は文化・芸術でも、4年間のオリパラ関連の文化プログラムなどを通じて、絵画や造形、舞踊など幅広い分野で障害者アーティストの活躍が期待される。その先では、障害者アーティストの経済的な自立を後押しする仕組みづくりなども課題になりそうだ。

リオ・パラリンピックで銅メダルに輝いた日本の車いすラグビーは車いす同士の激しいタックルなどで五輪のラグビーとは別の魅力をアピールし、新しいファンを獲得。日本のスポーツ全体がパラ人気によって厚みを増した。障害者アートでも、独自性や斬新さで芸術分野に新しい風を吹き込むアーティストが正当な評価を得られるようになれば、芸術分野全体でのダイバーシティが促進され、日本の文化に厚みが加わるだろう。（ライター 三山彩音）

### 個性豊かな力作並ぶ 障害者芸術祭エナジー2016 開幕 徳島新聞 2016年10月12日

個性豊かな作品が並んだ徳島障害者芸術祭「エナジー2016」＝県立21世紀館多目的活動室



芸術活動を通じて障害者の自立と共生社会の実現を目指す「第22回徳島障害者芸術祭エナジー2016」（徳島新聞社、徳島新聞社会文化事業団、ねっとわ〜くAs主催）が12日、徳島市の県立美術館ギャラリーと県立21世紀館多目的活動室で始まった。16日まで。

県内の252人と29団体が絵画や書道、陶芸、写真など281点を出品。最優秀賞のエナジー大賞には、障

害者支援施設・箬蔵山荘（三好市池田町州津）の平山ヨシエさん（63）の絵画「旅立ち」と同・春叢園（松茂町広島）の利用者らでつくるグループ「なごむ班」のオブジェ「NEWS PAPER」が選ばれた。

平山さんの作品は、色鉛筆の淡い色合いで動物が動き出そうとする様子を縦39センチ、横53センチの紙いっぱいに表現。なごむ班は筒状にした長さの異なる新聞紙を1メートル四方に約3千本立てた。

このほか、阿波踊りを表現した折り紙、モアイ像の陶芸など個性豊かな作品が並んでいる。阿南市畷町亀崎、障害者支援施設生活支援員の表原英代さん（58）は「いろいろな材料を使って表現する発想力がすごい」と感心していた。

県が認定している、優れた技術・技能を持つ「障がい者マイスター」の作品も特別展示

されている。

芸術祭は午前10時から午後5時まで（16日は午後4時まで）。入場無料。

大賞以外の受賞者は次の皆さん。

〔エナジー賞〕富岡稔、上佐正紀、平野沙織、山口正、平尾通、小椋佐知子、マザーグースの家、y u y a、野田晋悟、ひのみね陶芸クラブ〔審査員特別賞〕釣井克彦、あおばの杜陶芸チーム〔ねっとわ〜くAs賞〕高見良信、木村健、多田浩、未来よつ葉のクローバー、中田裕之

## 世界の首脳をもてなすワイン 足利で醸す 主役は障害者、「ココ・ファーム・ワイナリー」ライター / 日本ソムリエ協会認定シニアワインエキスパート 猪瀬聖



日本経済新聞 2016年10月12日  
「ココ・ファーム・ワイナリー」のワイン。「風のルージュ」は洞爺湖サミットで振る舞われた

ワイン愛好家が一度は訪れたいワイナリーが、栃木県足利市の山の中にある。名前は「ココ・ファーム・ワイナリー」。2008年の北海道洞爺湖サミットや今年広島で行われた主要7カ国（G7）外相会合など、日本で開かれる重要な国際会議の舞台では、必ずと言っていいほどココ・ファームのワインが振る舞われる。そんな日本を代表する

ワインを造っているのは、個性あふれる元気な知的障害者たちだ。

### ■仕込みの秋 手作業が決め手

ココ・ファームを訪れたのは9月中旬。ブドウを収穫しワインの仕込みに入る秋は、ワイナリーにとって1年で最も忙しい季節だ。

倉庫のような大きな施設の中では、運び込まれたブドウの選果が行われていた。房の中から、熟し具合が足りなかったり潰れたりしている実を人の手で取り除く作業で、ワインの質を左右する重要な工程だ。ワイン造りは機械化が進むが、選果は依然、人手に頼るところがほとんどだ。選果を経た実は、機械で茎から切り離され、集められて発酵タンクに運ばれる。



この日、選果作業をしていたのは、ワイナリーの専従スタッフや海外からの研修生ら数人。両手を素早く動かし、実をより分けていた。そのかわらで、空の箱を片づけたり、機械から吐き出された小枝の束を、大きなフォークですくって別のかごに移したりする作業をしていたのが、障害者たちだ。

### ブドウを収穫、選果作業をする

「ブドウの入荷が多い時は、園生（えんせい）も選果作業をします。『自分の食べたい実だけ残してね』と指示すると、ものの見事によい実だけを残します」。こう話すのは、施設を案内してくれた池上峻さん（35）。池上さんは、ココ・ファームを開いた故・川田昇氏の孫にあたる。

池上さんが障害者たちを「園生」と呼ぶのは、ココ・ファームで働く知的障害者は全員、同じ敷地内にある知的障害者支援施設「こころみ学園」の入居者だからだ。同学園には現在、男女合わせて90人の知的障害者が暮らす。

ココ・ファームはもともと、こころみ学園の創設者である川田氏が、園生一人ひとりが生き生きと働ける場所をつくりたいと、1980年に設立。それ以前から、生食用のブドウを



作っていたが、価格の変動が大きく収入が不安定だった。そこで、より安定収入が見込めるワイン造りに乗り出したというのが、ワイナリー開設の経緯だ。ココ・ファームの「ココ」は、こころみ学園の「ここ」から取った。

### ■ワインは畑で造られる

ココ・ファームが持つブドウ畑のうち、最も古い畑は、醸造施設やこころみ学園を見下ろす山の、平均斜度 38 度という急斜面に広がる。ここに、赤ワイン用品種のマスカット・ベリーAや白ワイン用品種のプティ・マンサンなどが、びっしりと植えられている。

「ワインは畑で造られる」という言葉がある。ワインはブドウのみを原料とするため、いかによいブドウを育てるかが、ワイン造りにおいて最も重要という意味だ。その重要な畑を管理するのも、園生の仕事だ。

60 代のKさんは、毎日、徒歩で山の頂上まで行き、崖の上から缶をたたいて大きな音を立て、ブドウを狙うカラスを追い払うのが仕事。仕事熱心なあまり、注意していないと台風が来ていても山に上ってしまうのが玉に瑕（きず）だが、池上さんは「なぜか、他の人がやるとカラスが逃げない。気迫が違うのでしょうか」と笑う。Kさんに話しかけると、一瞬手を休めて、「カラスを追い払うのは面白い」と答えてくれた。



### 傷んだブドウの実を摘み取るOさん

畑の中で、傷んだブドウの実を摘み取る仕事を黙々とこなすのは、40 代のOさん。重度の自閉症で人との会話に難があるが、仕事は正確だ。「Oさんはすごい能力を持っているんです」と池上さん。聞けば、辞書を読むのが趣味で、難しい漢字もスラスラと書けるのだという。

夏場は、除草剤を散布する代わりに、畑作業が可能な園生総出で、畑の草刈りをする。雑草が伸びると湿気がたまり、ブドウにカビなどの病気が発生しやすくなるためだ。農薬をできる限り使わないブドウ栽培が世界のワイン造りの主流になりつつあるが、ココ・ファームで除草剤を使わないのは、使うと園生の仕事なくなるから。しかし、それが結果的に、土壌の活力を維持し、高品質のワインを生む秘訣となっている。

### ■同情で買ってもらうワインはダメ

炎天下で急斜面を移動しながら手先を使う作業は、年齢的に若くはない知的障害者には、けっして楽ではない。だがそれも、川田氏の信念と障害者支援にかける情熱の反映だ。知的障害者はともすれば、かわいそうとの理由で過保護に扱われることもある。しかしそれは本人たちのためにならないと感じた川田氏は、あえて厳しい労働を課すことで、障害者に生きる喜びを与えようとしたのだ。



### 「ココ・ファーム・ワイナリー」のブドウ畑

ワイン造りに関しても、池上さんは、「祖父は初めから、『同情から買ってもらえるようなワインは、しょせん、一度きりしか買ってもらえない。何度も買ってもらえるような本当においしいワインを目指す』と言っていました」と話す。

1989 年には、カリフォルニアの有名ワイナリーで修行を重ねた米国人醸造家のブルース・ガットラヴ氏を招へいし、醸造責任者に据えた。世界最先端のワイン造りのノウハウを持ち込み、園生からは「ブルースさん」と慕われた同氏の 20 年以上にわたる貢献も、ココ・ファームにとっては大きな財産となっている。

こうして造られたココ・ファームのワインは、川田氏が望んだとおりの多くのファンが付いた。田崎真也氏など著名ソムリエの目にとまり、サミットなどの大舞台でも、日本を代

表するワインとしてお披露目されるようになった。日本航空の国際線ファーストクラスのワインリストには、現在、世界の偉大なワインと共にココ・ファームの白ワイン「月を待つ」が名を連ねている。

ココ・ファームのワインは、園生同様、個性にあふれている。たとえば、北海道洞爺湖サミットの夕食会で振る舞われた赤ワイン「風のルーージュ」は、豊かな果実味と酸味のバランスがよく、肉料理にぴったり。人気のロゼワイン「こころぜ」は、フレッシュな果実の香りに加えてほのかな甘みも感じ、さまざまな料理と合わせやすい。

「素晴らしいワインには、必ず素晴らしい物語がある。それが他のお酒にはないワインの魅力です」。ワイン愛好家としても有名なある日本人の経営者は、私の取材にこう語ったことがある。

ココ・ファームのワインがこれだけ多くのワインファンを惹きつけるのは、こころみ学園の園生一人ひとりの物語がぎゅっとボトルに詰まっているからに違いない。取材の最後に、ワイナリーのテイスティングルームでグラスを傾けながら、ふとそんなことを考えた。

今この原稿を書きながら、池上さんのこんな一言を思い出している。「ときどき園生が、ワインをテイスティングしているお客さんを遠くから眺めていることがあるのですが、よく見ると、その表情が何となく誇らしげなんです」

◆アクセス情報◆ 最寄駅はJR両毛線足利駅または東武伊勢崎線足利市駅。ワイナリーまでは、両駅からタクシーで約20分。ワイナリー内のワインショップは午前10時から午後6時まで営業。テイスティング（1人500円）は午後5時まで。現地で申し込めば、ワイナリー内の見学もできる（所要時間45分、1人500円）。詳しくはホームページ（<http://cocowine.com/>）を参照。

猪瀬聖（いのせ・ひじり）

1964年栃木県生まれ。慶応義塾大学法学部卒。米コロンビア大学大学院（ジャーナリズム・スクール）修士課程修了。新聞記者を経てフリーに。日本ソムリエ協会認定シニアワインエキスパート。著書に『仕事ができる人はなぜワインにはまるのか』（幻冬舎新書）など。

知的・発達障害児 住まいの工夫 友野賀世

朝日新聞 2016年10月12日



知的障害や発達障害のある子どもは、自宅の窓から急に外に飛び出したり、台所の火に強い関心を示したりする場合があります。危険を防ぎ、落ち着いて暮らせる住まいにするにはどうすればいいか、様々なアイデアを盛り込んだ本が出版されました。著者の1人で1級建築士の西村顕さんは「あまり情報がない分野。困っている人たちの役に立てば」と話しています。

この本は「知的障害・発達障害のある子どもの住まいの工夫ガイドブック」（中央法規出版、税別2400円）。西村さんは横浜市総合リハビリター

「ガイドブック」で示された工夫例

困りごと ▶ 工夫例

 <p><b>トイレ</b> トイレトーパーを出し続ける</p>	<p>1回分のみ取り分けて見える場所に置く 費用の目安: 0円～</p>
 <p><b>スイッチ・インターホン</b> 何度も押す</p>	<p>手作りのカバーで見えないように覆う 0円～</p>
 <p><b>テレビ</b> たたく、よじ登ろうとする</p>	<p>テレビを壁掛けにする 約4万円～</p>
 <p><b>カーテン</b> ぶら下がって破損</p>	<p>装飾レールに換え、面ファスナーでつす 約4万円～</p>
 <p><b>台所</b> 調理中に火や包丁に触ろうとする</p>	<p>鍵付きの格子戸を設置 約15万円～</p>

ジョンセンター職員で、医療や福祉の専門職と共に高齢者や障害者の住宅改修相談にのったり、住宅関係の調査研究をしたりしている。

身体障害だけでなく、知的障害や発達障害の子どもがいる親も、住まいに関わる悩みがあった。「高齢者や身体障害者向けの住宅改修に関する本はあるが、こうした子どもたちが対象のものはない」と思い、これまでの蓄積をB5判144ページにまとめた。

自閉症と知的障害のある男の子（8）と家族が暮らす一戸建ては、療育センターから紹介された西村さんの助言を受けて改修した1軒だ。

1回目は、3～4歳の頃の掃き出し窓。男の子は外に興味を引かれるものがあると、車の往来などに構わず窓から飛び出しがちだった。母親（41）は「事故に遭ったり、誘拐されたりしないか心配でした」と振り返る。そこで、内側から鍵をさして施錠する窓に改修。「外に出たいときは親に伝えて、玄関から手をつないで一緒に出かける」というルールにし、飛び出しを防ぐようにした。

### 発達支援に主眼、充実 「フルール・みかた」新施設完成

日本海新聞 2016年10月12日

障害のある児童生徒を放課後に預かる「フルール・みかた」の新施設（兵庫県香美町村岡区和田）の完成と、兵庫県の「放課後等デイサービス」の事業指定を記念し11日、現地で開所式が開かれた。県指定により新温泉町民の利用も可能になった。新しい船出を関係者と祝い、障害者福祉の一層の発展を願った。

施設は、昨年出石特別支援学校みかた校の開校に合わせ、NPO法人村岡ひまわりの会（日向智子理事長）が、同校に隣接する射添小内に設置。香美町の委託事業のため、利用は町民に限られていた。

同NPO法人は、香美、新温泉両町の補助金を活用し、今年6月に学校近くの民家を購入。バリアフリー化などを施して新施設とし、事業計画も見直して県に指定を申請していた。



出石特別支援学校みかた校近くの民家を改装したフルール・みかたの新施設＝11日、香美町村岡区和田

これまでの託児による保護者支援の色合いが濃かったが、今後は子どもの発達支援に主眼を置く。能力に応じて言葉覚えやあいさつ、物の仕分けなど、学校と同様に個別の学習目標を設定。利用者同士での遊びや制作活動を通じて、社会性の醸成を図る。

開所式には両町職員や社会福祉関係者、地域住民などが出席。日向理事長は「今、フルールがあるのは関係者の理解と情熱、深い見識のたまもの。引き続きのご支援を」と謝辞を述べた。

施設の利用対象は、障害児通所給付費支給決定を受けた小学1年～高校3年の児童生徒。利用には登録が必要で、利用料は同給付費により1割負担となる。（福谷二月）

### 障害のあるなし関係なく交流を 松戸でイベント

東京新聞 2016年10月12日



障害のある、なしに関係なく交流することで「心のバリアフリー」を広げるイベント「みんなのふれあい☆フェスタ」が、松戸市栗ヶ沢の県立松戸特別支援学校で開かれた。

家族連れなどが点字の名刺やコピー用紙を使ったハロウィーングッズを作ったり、車いすを体験したり。プラスチック製円盤を投げてゴールに入れる「ディスクゴルフ」などもあり、思い思いに楽しんでいった。



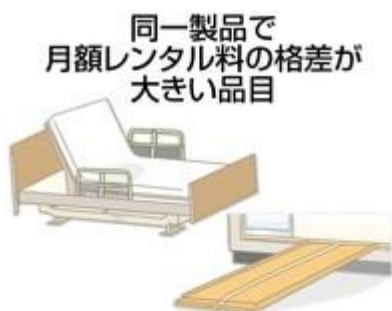
障害者や障害のある子どもの母親らが、心のバリアフリーを広げようと、実行委員会を立ち上げ、企画した。同校に通っていた実行委メンバーの新井丈晴さん（28）は「こういう機会を増やして、障害者と健常者の交流を広げていきたい」と話していた。（飯田克志）

## 福祉用具のレンタル 業者の裁量で価格に差 保険料にしわ寄せ

東京新聞 2016年10月12日

介護保険制度のサービスのひとつとして実施されているベッドや車いすなど福祉用具のレンタルについて、同じ製品でも月額レンタル価格に大きな差が生じている。他の介護サービスと違い、公定価格がなく業者の裁量に委ねられているためだ。利用料は介護保険と利用者の自己負担で賄われているため、不必要な費用負担が生じているのではないかと、厚生労働省などは問題視。十二日に開かれる社会保障審議会介護保険部会でも、高額なレンタル料をどう抑制するか焦点となりそうだ。（中根政人）

介護保険では原則、サービスごとに公定価格が決められ全国一律で同じサービスなら月額で受けられる。しかし、福祉用具レンタルには公定価格がない。厚労省の担当者は「レンタル価格には、メンテナンスなど業者のサービス料金も含まれ、価格設定が業者の裁量に委ねられている」と説明する。



品目	介護ベッド	手すり(住宅用)	スロープ(同)
平均価格	8803円	1741円	597円
最高価格	10万円	2万円	7180円
販売価格	18万円程度	5万円程度	5000円程度

(財務省調べ)

財務省が全国平均価格と最高価格の差を調査したところ、三製品で価格差が十倍を超えた。玄関などの段差を解消するスロープは最高価格が平均価格の約十二倍、住宅内で使う転倒防止用の手すりと、背もたれ部分の角度を調節できる介護用ベッドは約十一倍。介護用ベッドは平均価格の八千八百三円に比べ最高価格は十万円になっていた。スロープの最高価格は新品の販売価格も上回っていた。

利用者が負担するのは価格の一、二割だが、塩崎恭久厚労相は「標準よりもはるかに高い負担を税金を通じ背負うことで(介護保険制度が)長持ちするかどうか」と、適正化に乗り出す方針を示している。

レンタル価格に関し、市区町村が利用者に利用予定の福祉用具がどれくらいの価格帯かを通知する仕組みがあるが、通知の実施は自治体によってばらつきがある。公益財団法人「テクノエイド協会」がインターネット上で平均価格などを検索できるサービスを二〇一四年から提

供しているが、利用者への周知は十分とは言えない。

利用者は、用具を選ぶ福祉用具専門相談員に複数の製品の紹介を受けたり、介護サービス計画の作成などを担うケアマネジャーに価格の妥当性を相談したりして選ぶことが大切だ。

この問題は七月の介護保険部会でも取り上げられ、委員からは是正を求める意見が出た。厚労省は十二日の部会にケアマネジャーのチェックを強化する対策などを提案する。

淑徳大の結城康博教授（社会保障論）は「業者の裁量で決まっているレンタルの価格設定の在り方は見直すべきだ。厚労省が品目ごとの上限価格を設定するなど業者側に適正な価格でのサービス提供を徹底するなどの施策が必要になる」としている。

<福祉用具レンタル> 介護が必要な高齢者が、自立した在宅生活を送るための器具を月額のレンタル料を払って利用できるサービス。費用の9割を介護保険から支払い、1割（一定以上の所得がある人は2割）を利用者が負担する。厚生労働省が介護用ベッドや車いす、手すりやスロープ、歩行補助のつえなど13品目を指定、同じ品目でも多種類あり、

製品数は数千種類に上る。レンタル対象用具と別に一部の消耗品は購入できる。2014年度のレンタル額（利用者負担含む）は約2755億円で、介護費用全体の2～3%程度とされる。

### 重心移動で全方向に動く電動車いす 諏訪東京理科大など開発

日本経済新聞 2016年10月12日

諏訪東京理科大学や福祉用具製造のアイデアライフケア（岡谷市）などは11日、重心を移動させただけで全方向に動く電動車いすを開発したと発表した。前後、左右、上下の重心の変化をとらえる慣性計測装置により球体の駆動部分を制御して動かす仕組みで、傾けた方向に即座に動く。坂道を動くときにも座面を水平に維持できる。2017年の実用化を目指す。

名称は「一球さん（仮称）」。駆動部分は電動のACサーボモーターで、直径約31センチメートルの天然ゴムで覆った中空ステンレス球体を動かす。慣性制御装置はセンサーがとらえた重心の変化を1秒間に1500回計測し、球体の動く方向を制御する。地方創生交付金約400万円を活用した。

利用者の体重の上限は120キログラム。最高速度は時速6キロメートルで、傾きが5～6度の坂道で利用できる。停止時は付属のスタンドで安定した姿勢を確保できる。今後は手元のスティックで操作できるようにしたり、座り心地を良くしたりする改良を加える。

球体を制御して駆動させる技術や理論は諏訪東京理科大工学部の星野祐教授が開発し、車いすの座面部分の構造やデザインはアイデアライフケアが担った。諏訪地域の製造業の販路開拓などを支援するNPO（非営利団体）法人、諏訪圏ものづくり推進機構（諏訪市）も開発に協力した。

### 中日新聞が記事を削除 貧困巡る連載「想像で書いた」 朝日新聞 2016年10月12日

中日新聞社（名古屋市）は、中日新聞と東京新聞に掲載した子どもの貧困をめぐる連載記事に事実とは異なる記述などがあったとして、両紙の12日付朝刊におわびを掲載し、当該記事を削除した。

同社によると、問題となったのは、5月に中日新聞朝刊で6回連載した「新貧乏物語」第4部のうち、父親が病気の女子中学生を取り上げた19日付朝刊の記事。生活が厳しくて教材費や部活の合宿代が払えない、とした部分など3カ所が事実ではなかったという。

記者は家族らに取材して取材メモをつくっていたが、この部分は「原稿をよくするために想像して書いてしまった」と説明しているという。家族から指摘があり、同社が社内調査をした。同じ記事は6月に東京新聞にも掲載された。

5月17日付の中日新聞に掲載したパンの移動販売を手伝う少年の写真も、同じ記者が、実際とは異なる場所でカメラマンに撮影させていたという。

両紙は、臼田信行・中日新聞取締役名古屋本社編集局長名で「記者が事実と異なることを自ら知りながら書いたことは到底許されません。深くおわび申し上げます。厳正に処分するとともに、記者教育に一層力を入れていきます」とするコメントを掲載した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行